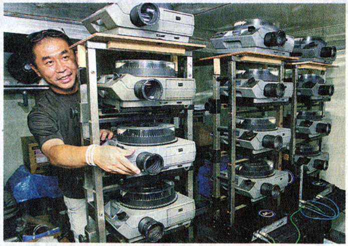
巨大な銀幕にいくつもの写真が浮かんでは消える。ときに映画よりも迫力がある映像手法「マルチスライド」。つい最近まで、博覧会や企業PRにひっぱりだこだったが、デジタルカメラの普及などで急速に衰退した。消えゆく銀塩映像を、ひたすら守り続ける〝最後〟の技術者たちがいる。

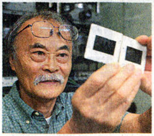
写真と音の芸術「マルチスライド」

銀幕〝花火〟最後の瞬き

メコン流域では、どこへ行っても、
夕方になると人々が水浴びをしている。
一日の締めくくりの
儀式みたいなものかもしれない。

管さんの写真で制作したマルチスライド作品「いきる　メコン・悠々流転」から





㊤12台の映写機を調整する井形伸一さん　㊦「1枚ずつ手作業で作った」と話す福井正紀さん＝いずれも杉並区で

「バブルのころは忙しくて忙しくて。ひたすら作り続けていたら、あるときパッタリ注文がなくなった。それからあっという間でした」

マルチスライド制作技術者で中野区の福井正紀さん（六七）は自嘲気味に笑う。

映写機の製造も打ち切られ、現在稼働しているのは、杉並区で映像会社を営む井形伸一さん（四六）の所有機だけ。井形さんも「修理しながら使っているが、あとどのくらい持つか」と嘆息する。

マルチスライドとは、スライド映写機を多いときで十台以上組み合わせ、音楽とともに次々と銀幕にスライド写真を投映する映像作品。何枚も同時に映したり、重ね合わせたりしてストーリーを生み出す。目にした人も多いはずだ。一九九〇年代の終わりまで、大規模なイベントでは企業の商品PR映像などで頻繁に上映されていた。

シナリオに沿って一枚ずつスライドを作るほか、映写機が順番に映すようプログラムも必要。高度な表現を求めるほど制作者集団は大所帯となった。「八〇年代には制作や上映する関連会社が全国で百社ほどあった」（福井さん）。その歴史は一九三〇年代のパリ万博に始まるという。

福井さんが初めて出合ったのも大阪万博（七〇年）のパビリオンだった。当時ニュース映画の制作会社で働いていた福井さんは「面白いものがあるなあと感動して。知人の映画監督たちと『日本でもやってみるか』と、機械もろくにないのに手作りで始めた」。

映像技術の進歩とともにマルチスライドはイベントの〝花形〟になっていく。米国の進んだ表現技術に触発され、八一年には福井さんの呼びかけで「日本マルチイメージ協会」（会員二十五社）も設立。十年ほどで解散したが、会社の枠を超えて技術の向上に取り組んだ。

だが、バブル崩壊で企業は真っ先にPR映像の制作を打ち切り、需要は激減。さらにデジタルカメラやパソコンの普及で「気づくと、もう顧みられなくなっていた」。最も盛んだった米国でさえ廃れたという。

福井さんと井形さんらは二〇〇四年に、マルチスライドへの愛惜と、衰えることのない情熱を込めて〝最後〟の作品を作った。地元・高円寺の阿波おどりを題材にした十一分の映像だ。仲間うちで楽しむためだけに、今もマルチスライドの技術を生かした「阿波おどり」を作り続けている。だが、翌年からはフィルムではなくデジタルカメラで撮影し、パソコンで制作している。

「いきる　メコン・悠々流転」から

映写機だけではなく、マルチスライドに必要な特殊フィルムも、もう製造されてはいないからだ。満足いく〝新作〟はもはや望めない。福井さんは「厚みが全然違う。デジタルカメラだと写りすぎる」と苦笑する。

「迫力知って」来月上映会

来月、久々にマルチスライド作品が上映される。映像技法を惜しむ写真家の管洋志さんが、講演会で披露する。

管さんは「映像の迫力を、テレビしか見ていない若い世代にも知ってもらいたい。写真関係者にはぜひ見てもらいたい」と力を込める。管さんの写真をもとに、福井さんらが五年前に手掛けた「いきる　メコン・悠々流転」（十六分）で、六百五十枚のスライドを十二台の映写機で上映する大作だ。

「二度と再現できない花火のようなもの」。再び〝花火〟が求められる日を期待しながら、福井さんは繰り返す。

管さんの講演会は、来月十九日午後六時半から、日本アムウェイ本社（渋谷区宇田川町）で。入場無料。事前申し込みが必要。問い合わせは、同社＝電03（5428）7960＝へ。

文・中山洋子／写真・坂本亜由理／紙面構成・勝間田秀樹